

認知症とマンションー日本マンション学会名古屋大会参加記一

1. はじめに

日本マンション学会の創立 25 周年の大会が 4 月 22 日 23 日の両日、名古屋の椋山女学園大学であった。7 つの分科会とメインシンポジウム、懇親会、見学会などがあり、充実した内容と工夫された企画によって、大いに学び、楽しんだ二日間であった。

分科会の中に、マンション管理の実務を紹介するパートがあって、今年は 4 つの発表があったのだが、その中には私どもの機構の宮崎主任専門委員による「小学生マンションドクター養成塾」(ドクターニュース No108, 109 などに一部掲載)の活動報告もあった。大阪市、神戸市、京都市などの自治体と連携したこの取り組みは小学生と親が参加してマンションのシステムを勉強するもので、珍しい企画なので、興味を持って聞いてもらったものと思う。司会者から質問があったりした。

2. 認知症とどう付き合うか

さて、盛りだくさんの内容があった大会であったが、メインシンポジウムで取り上げられた「マンションで認知症とどう付き合うか」の中から、興味深かった事柄について、以下に触れてみたい。

マンションと認知症の関わりをテーマにしたシンポなどはこれまであまり見られず、その点で新しい企画であった。まず、初歩的な事柄の共通認識が必要なように感じられたのだが、これを機会に今後さらに問題と対策などが議論され深められることであろう。

①どんな問題が起こっているか

まず、認知症と思われる人は全国で 462 万人、その内マンションでは 55 万人程だという統計が説明され、続いて認知症によるトラブル事例などが各報告者などから紹介された。どのようなものかといえば、多いのが「物を盗まれた。(実際は盗られてない)」とか「徘徊」あるいは「共用部分を排便などで汚す」、「住戸内やベランダにゴミをいっぱい溜めている。いわゆるゴミ屋敷化」、「水漏れ事故を起こす」、「管理費などの滞納があるが、本人には話を通じず、身寄りや連絡が取れない」、「ベランダの物を除けてくれない、工事が出来ない」などなどである。

②対策を巡って

報告者の発言や相互討論で興味のあることがいくつかあった。

まず基本的なこととして、マンションの管理組合は認知症問題にどこまで関わるべきかとの問い掛けである。問題が建物や設備の維持管理や組合運営などの日常管理に関わってくることがあることから、まったく没交渉で、関わりなしとはいかない。管理組合での対応か、それとも自治会の対応なのかという問題提起もあった。一方専

門家に任すべき時を誤らないことの重要性も指摘された。

高齢者の一人住まいでの孤独死や認知症によるトラブル予防の方法に「見回り」があり、その経験が報告された。実行しているマンションではいろいろな方法を工夫している。

トラブルを深刻にしないために、高齢者の一人住まい住戸の鍵を管理組合で預かっているマンションの経験が報告された。スペア鍵を管理組合で預かるというのは、大胆な取り組みと言えるが、マンションでの議論が充分なされ、適切なルールが作られて実施されることはあり得よう。

順番制の役員選出方法を採用しているマンションで、認知症の人を役員に迎えることについて議論がなされたと言う。そのマンションでの結論は受け入れていくということだった。この結論についても、認知症に対する理解と十分な意見交換、そして対応策を考えておくことが必要だと感じられた。



3. おわりに

今後、認知症へのマンションでの対応は、多くのマンションの経験を互いに知り合い、交流を重ねることが重要だ。管理組合や自治会、あるいは任意のボランティアのグループなど、それらがどのような方法で対応しているか、地域包括支援センターなど地域の機関や専門家との連携はどのように行っているかなど、それぞれのマンションの条件を知りつつ学びあうことが必要だろう。

メインシンポを聞き終わり、認知症についての理解や人権尊重への配慮など多くが心に残った。認知症への対応の成否は、集合住宅で共同で暮らすことの生かし方が問われているように感じた。このシンポのあった数日後に京都で国際認知症国際会議が開かれたことを知ったのだが、名古屋大会のメインシンポは時節にマッチしたテーマを選んだのである。

(理事長 梶浦恒男)